

おはなし会における子どもへの読み聞かせの実践に関する考察

山田 純子*

A Consideration on the Practice of Reading Stories to Children in Story-telling Events

YAMADA Junko

要約

本稿は、子どもへの読み聞かせ活動「おはなし会」の意義を明らかにすることを目的とする。幼稚園教育要領(2017)の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には「言葉による伝え合い」を通して先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、言葉による伝え合いを楽しむようになる〔1〕と記述されており、相互関係の重要性が示されている。そのため、子どもと読み手との相互関係に注目し考察した。また、おはなし会の絵本の選書も大切な要素であることが明らかになった。

キーワード：読み聞かせ、絵本、おはなし会、子ども

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the significance of ‘*Ohanashi Kai*’, or story-telling events, an activity of reading to children. The National Curriculum Standard for Kindergartens (2017) states in “the Ideal Image by the End of Childhood” that “children will enjoy communicating through words as they become familiar with picture books and stories while communicating with their teachers and friends through words [1],” indicating the importance of interactive relationships. Therefore, there was a focus on the interrelationship between the child and the reader. It also became clear that the selection of picture books for storytelling sessions was an important factor.

Keywords: reading stories, picture books, story-telling events, children

I はじめに

保育所・幼稚園・認定こども園など就学前保育・教育施設の子どもが生活する集団の場において、読み聞かせは日常的に実践されており、保育者が子どもと絵本を繋ぐ役割を担っている。さらに、保育・教育の実践だけでなく、「読み聞かせ」という言葉とともに読書運動の中で日本中に広がり、子どもに本を出合わせる効果的な方法として公認されてきた。そして、図書館などいろいろな場所で子どもたちに絵本等の読み聞かせをする「おはなし会」が開催されている。

本学でもゼミナール活動の一環として「高松大学読み聞かせ隊」を組織し、読み聞かせのボランティア活動を行っている。学生にとっては保育の営みとして読み聞かせに必要な知識・技術を得たり、子どもと触れ合う活動を通して培われる子どもへの理解力を高めたりすることに繋がると考えている。また、子育て支援の観点から、親子のコミュニケーションを図るための支援の一つとして、親子がよい時間を共有することができる読み聞かせを推奨していくことも大切な役割と考える。

本稿では子どもへの読み聞かせ活動「おはなし会」の意義を明確にし、子どもと読み手や参加者との相互関係(相互行為)に注目し、おはなし会の実践事例から学生の姿勢や具体的ななかかわりについて考察する。また、絵本の選書がおはなし会の大切な要素であることに鑑みて、実践の取組の検討を行い、今後の活動の充実に活かしていきたい。

II 読み聞かせ活動「おはなし会」の意義

1. 絵本の教育的意義

幼稚園教育要領(2017)の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には「言葉による伝え合い」として「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる」〔1〕と記述されている。また、領域「言葉」のねらいには「(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」〔2〕と示されている。このことから、絵本を介して「先生や友達と心を通わせること」、「豊かなイメージを形成すること」、「豊かな言葉や表現を身に付けること」をねらいとして、言葉に対する感覚を豊かに育むための保育実践が期待されているといえる。

また、松居直(1981)は、選び抜かれ、芸術家の豊かな感性や理性で組み立てられ、整えられた言葉が絵本の中には込められている。また、絵本を仲立ちにして心が通い合うなどと述べている。〔3〕その他の絵本の意義として、心の開放、喜びや楽しさを与える、思考力・イメージを広げ豊かな心情が育つ、知的好奇心や科学性の芽生えを育む、集中して話を静かに聞き、読書についての意欲や態度が育つ、語彙が増え、話す力や言葉の表現などの言語能力が豊かになる、物を大切に扱った

り、整理整頓をしたりする習慣を養うなどが挙げられる。

2. 読み聞かせ活動「おはなし会」の意義

(1) 大人から子どもへ、子どもから大人へ

読み聞かせは「子どもの読書への大人のお手伝い」である。子どもにとって読み聞かせは、それが絵と文を読み取るといった極めて意識性の高い行為だけに、読み聞かせてくれる大人との間に基本的信頼関係が確立していることが必要である。

絵本の中の言葉が、読み聞かせによって子どもの耳に届くとき、語彙力の乏しい子どもでも耳からの言葉と絵の助けを借りて理解することができる。子どもは読んでもらいながら想像力を働かせ、物語の世界を絵の助けを借りつつ自分の脳裏に鮮やかに描き出し、心でそれを組み立てるという過程において、思考力を刺激し活性化するのに役立つといわれる。

加えて、読み聞かせを通して、子どもは読み手から自分に対する愛情を感じ取り、感動を共有しながら心が通い合い情緒が安定していく。そして、読み聞かせは、大人と子どもの心の交流を図る大事なコミュニケーションの場でもある。つまり、①自分の好きな大人と一緒に、本の世界の楽しさを味わうことができる ②親しい友だちと一緒に、心を躍動させる未知の世界への冒険ができる ③新しい知識を吸収して、自分を拡大していける成長への喜びを味わうことができるといえる。

(2) 絵本との出会いの場

子どもが絵本と出会う場として主に次の4つが考えられる。

- ・ 保育・教育の場での出会い
- ・ 図書館等での出会い
- ・ 書店での出会い
- ・ おはなし会での出会い

そして、それぞれの場での役割とそれに応じた取組が求められる。

本学の読み聞かせ活動「おはなし会」の特性としては次のことが挙げられる。まず、読み手と聞き手が初対面であることが多い。また、聞き手同士も同様である。二つ目に、聞き手の年齢や経験、興味・関心などの情報が少ない場合がある。三つ目に、実際に絵本を読むため、直に絵本の魅力を伝え、おはなしを届けることができる。

以上の観点から、本学の読み聞かせ活動の意義を次のようにとらえた。

- おはなし会という場で読み聞かせを通して絵本の魅力を伝え、直接お話を届けることができる。
- おはなし会での出会いの中で、子どもと読み手や参加者との相互のふれあいを楽しむことができる。初対面であれば、なお、その場での出会いやかかわりを通

して人への関心を深めることができる。

Ⅲ 子どもと読み手や参加者との相互関係

1. 実践事例

(1) 実践方法について

読み聞かせ隊「おはなし会」は次のように実践方法、内容をテキストとしてまとめメンバーの共通理解を図っている。また、小学生の読み聞かせ講座のテキストとしても利用している。

① 読み聞かせとおはなし会について

1) いろいろな読み方

○黙読（もくどく：声に出さず目で読む）

- ・速く読めます。静かに読むので人の邪魔（じゃま）になりません。

○音読（おんどく：声に出して読む）

- ・書いてあることが分かりやすくなります。
- ・楽しくゆっくり味わって読めます。

○朗読（ろうどく：書いてあることが聞く人に伝わるように感情をこめて読む）

- ・聞いてくれる人によく伝わるために、声の大きさや抑揚（よくよう）、速さなどを工夫（くふう）します。
- ・表現する楽しさがあります。

○群読（ぐんどく：人といっしょに声を出して読む）

- ・人といっしょに声を出すことで、合唱（がっしょう）のような楽しさが味わえます。

2) 読み聞かせについて

「読み聞かせ」は読んで聞かせるということですから、読み方としては朗読に似ています。しかし、「読み聞かせ」は、聞く人を目の前にして、読んで聞いてもらうのですから、例えると映画やレコードよりは演劇（えんげき）・お芝居（おしばい）やライブに似ています。聞いてくれる人との直接の交流が生まれます。そのいっしょに楽しんでいるという雰囲気（ふんいき）が大切になります。

3) 絵本の読み聞かせと紙芝居（かみしばい）について

絵本は絵と文字〔文章・ことば〕が同じページにあって、両方を同時に見ることができるようになっていて、ひとりで楽しむことができます。また、絵は少し遠くからでも見るできるので、読み聞かせをして集団（しゅうだん）で楽しむこともできるようになっています。そのとき、読み聞かせをする人は絵と文字両方を見ることができますが、聞く人は読む人の声と絵本の絵を楽しむようになります。

紙芝居は、声と絵を楽しむところは同じですが、絵だけが見えて文字〔文章

・ことば〕は裏に隠されているので、読む人は文字を見て、それを聞く人は絵だけを見るというように、読む人と見る人の役割（やくわり）が分かります。

この仕組みの違いによって、やりかたにも少し違いがあります。けれども、どちらも絵が中心になっていることは同じですから、聞く人に絵をよく見て楽しんでもらうことが大切です。そのために、絵本の持ち方やページのめくり方〔紙芝居ではぬき方〕などを工夫する必要があります。

4) 手遊び（てあそび）と体遊び（からだあそび）について

「おはなし会」をするときは、みんなで絵本や紙芝居を楽しむという雰囲気を作るためや、緊張感（きんちょうかん）をほぐして、また次のおはなしを楽しむようにするなどのために、手遊びや体遊びなどをします。

手遊びとは、おもに座って手を動かしてする遊び、体遊びとは、立って手足など体全体を使ってする遊びのことを言います。これを絵本の読み聞かせや紙芝居の間に入れると、みんなで仲良く（なかよく）楽しい時間をすごしていると感じることができます。

5) おはなし会について

おはなし会は、絵本の読み聞かせや紙芝居、手遊び、体遊びのほか、パネルシアター、指人形（ゆびにんぎょう）、クイズなどを組み合わせて行いますが、その内容を考えるときは、次のようなことに注意（ちゅうい）します。

- ・ 実施（じっし）するときの季節感（きせつかん）やクリスマスやひな祭りなどの年中行事（ねんちゅうぎょうじ）、子どもたちに伝えたいことなどを考えて内容を決めます。
- ・ 子どもたちの年齢（ねんれい）に合ったものを選び、言葉づかいにも気を付けます。
- ・ 子どもたちが疲れ（つかれ）ないように、時間の長さや組み合わせにも注意します。
- ・ 子どもたちだけでなく、保護者（ほごしゃ）や自分たちもいっしょに楽しいことをして交流するという気持ちで行います。
- ・ 子どもたちなどの参加者（さんかしゃ）が多いときや少ないときがありますが、それに合わせて楽しめるよう、工夫してがんばります。

②おはなし会を行うために

1) おはなし会の流れについて

おはなし会をする前に、まず大切なことはプログラムを決めることです。おはなし会を楽しんでもらうために、ただおはなしを聞いてもらうだけでなく、自己紹介や手遊び、体遊びを取り入れることで、聞いている人たちと触れ合うことができ、より楽しいおはなし会になります。

2) お話を選ぶポイント

- ・テーマや対象年齢にそった内容の絵本・紙芝居などを選ぶ。
(テーマの例：季節、動物、行事など)
- ・おはなし会の全体の時間配分に気をつける。(30分くらいを目安にする)
- ・実際に練習する。

3) 楽しいおはなし会にするためには

- ・チームみんなで、一つの楽しいおはなし会にする。
- ・恥ずかしがらずに自信をもって
- ・一番大切なことは・・・自分たちも楽しむこと

(2) 「おはなし会」実践事例

- ①実施日時 2023年7月16日 午前11:00～11:30 参加者：親子11名
午後13:30～14:00 参加者：親子16名

会場 中央図書館1階 おはなしの部屋

担当学年 2年生5名

②プログラム

テーマ 「せいちょう」	
自己紹介 手遊び	「大きくなったら〇〇になりたい」 はじまるよ はじまるよ
大型紙芝居	おおきく おおきく おおきくなあれ
手遊び	ころころたまご
絵本	そらいろのたね
体遊び	かみなりどんが やってきた
大型絵本	ふしぎな かさやさん

③読み手の反省・考察

- ・おはなし会が始まる前に集まっていた親子と会話をしたり、手遊びやリクエストのあった歌を歌ったりして、話し手に親しみを持ってもらうことができた。
- ・子どもはどのおはなしにも興味を示し、思いをつぶやいたり考えたことを言葉にして表現したりしていた。その子どもの反応やつぶやきに応じて対応、呼応することができた。
- ・予定の30分内で終了することができた。
- ・後方にいる子どもにあまり声をかけることができなかったので、次回は参加者一人一人の姿に気を配り対応したい。

- ・子どもの視線の先に次に読む本を置いてしまい、期待感が薄れてしまったかもしれないと思った。子どもがおはなしに集中できるような環境構成を考えた。

④ 中央図書館職員の感想

- ・デビュー戦とは思えないほどの子どもたちを巻き込む圧倒的な力と対象に合ったさばき方にとっても驚かされた。
- ・時間配分もぴったりで、何度も何度も練習していただいたのだと感じた。
- ・読み聞かせ隊のみなさんの熱意が参加者のみなさんに伝わり、一体感のあるおはなし会になったと思う。

2. 考察

読み手の学生や図書館職員が感じたように、おはなし会は読み手と聞き手との関係性がとても重要である。先に述べたように、子どもにとっては、読み聞かせてくれる大人との間に基本的信頼関係が確立していることが必要である。その点からすると、初対面でのおはなし会は開始前から読み手に親近感を抱いてもらえるかがポイントだと考える。事例のように好きな手遊びや歌を尋ねてそれを一緒にする、歌うなどの工夫や配慮が大切であることが確認できた。

また、保護者と会話をして、子どもが興味関心を持っていることをリサーチする必要性とともに、親と学生が親しそうに話をする姿を見て子どもは安心するということも裏付けられた。

IV 絵本の選書

中村（1991）は、絵本の読み聞かせにおいては、「聞き手としての子どもに関する要因」、「読み手としての保育者・教師や親に関する要因」、「絵本自体に関する要因」、「絵本と読み手の両方にかかわる要因」、「絵本と聞き手の両方にかかわる要因」、「読み手と聞き手の両方にかかわる要因」、「絵本・読み手・聞き手の三者にかかわる要因」の7つの変数が関与すると述べている。「聞き手としての子どもに関する要因」の具体例としては、性別・知識・理解力・情緒状態・興味や集中度、個と集団を挙げ、「読み手としての保育者・教師や親に関する要因」の具体例としては、発声の仕方・表現力・本の提示の仕方・態度・絵本についての理解度・子どもの発達や行動特徴についての理解度を挙げている。そして、保育実践者と学生を対象とした望ましい読み聞かせ条件の調査結果によると、「子どもの発達に即した絵本選択」、「読み聞かせ中、子どもへまなざしを向けること」、「読み聞かせ中の子どもの発言を尊重すること」が共通して高い評価を得ていることが分かった。〔4〕

また、會澤ら（2019）は読み聞かせの選書についての調査研究について次のように紹介している。「梶谷ら（2015）は、絵本を選ぶ際に何よりも大切にしたいこととして『物語の質』を挙げる。その際、絵本の文章と絵のバランスが重要であると指摘す

る。松居（1990）は、『絵の与えるイメージと文章の呼び起こすイメージがちぐはぐになったりしますと、子どもの心の中に混乱がおき、物語の世界へと入っていきません。文と絵のつくりだすイメージは同じ質のものであり、よく調和していなければなりません。』と述べている。中川（2013）は、年齢に応じて楽しめる絵本を選択すること、繰り返し読んでも飽きない、見るほどにますます好きになる本が適書であると指摘している。」〔5〕

このことから、子どもたちの発達や実態に合わせ、生活と直接かかわるような絵本、夢や冒険心を満たしてくれるような絵本などを選ぶことが大切であるといえる。そして、このことにより子どもの想像力を広げ、語彙力を高め、目に見えないものを見たり、感じたりする心を育てていくことができる。また、読み聞かせを通して、少しでも本の楽しさを体感させるとともに、一緒に絵本を楽しめるように心がけることが重要であるといえる。

V 今後に向けて

子どもへの読み聞かせ活動「おはなし会」の意義を明確にすることで、子どもと読み手との相互関係が重要であることが明らかとなった。今後はおはなし会のプログラムの精選やまた、絵本を紹介する技術の向上のための方策について検討していきたい。

引用文献

- 〔1〕〔2〕 文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』フレーベル館
- 〔3〕 松居直（1981）『私の絵本論—0歳からの絵本』福音館書店
- 〔4〕 中村年江（1991）『絵本の読み聞かせに関する心理学的研究—絵本の読み聞かせに関する変数と望ましい読み聞かせの条件の検討—』読書科学 35、149—159
- 〔5〕 會澤のはら、片山美香、高橋敏之（2019）『幼児を対象とした集団における絵本の読み聞かせに関する研究動向』岡山大学教師教育開発センター紀要第9号，pp. 215-228

参考文献

- ・梶谷恵子、脇明子、湯澤美紀、片平朋世（2015）『保育者を対象とした絵本選書の研修—共通テーマによる絵本三冊の比較—』ノートルダム清心女子大学紀要．人間生活学・児童学・食品栄養学編 39(1)、122-141
- ・中川李枝子（2013）『本・子ども・絵本』大和書房、104-106頁
- ・松居直（1990）『絵本・物語るよろこび』福武書店、23頁